

Weekly report



株式会社 ミンカブ・ジ・インフォノイド
東京都港区麻布台一丁目3-1

為替週間展望＝ドル円は155～157円のレンジを中心とする振幅が

〔9月7日からの1週間の展望〕

週間高低（カッコ内は日）		8月31日～9月4日			
	始 値	高 値	安 値	終 値	前週比
ドル・円	160.07	160.39(2)	155.30(3)	156.36	-3.73
ユーロ・ドル	1.1588	1.1641(3)	1.1566(2)	1.1628	+0.0043
=====					
国内株・金利／米国株・金利					
	終 値	前週末比	終 値	前週末比	
日経平均株価	65,020.94	-1384.62	日本10年債利回り	2.920	-0.011
ダウ平均株価	53,686.11	+126.12	米10年債利回り	4.768	+0.050
=====					
<来週の主要経済統計等>					
7日	日本7月景気動向指数速報値				
	独7月鉱工業生産指数				
	スイス8月雇用統計				
	ユーロ圏第2四半期GDP確報値				
8日	日本第2四半期GDP2次速報				
	日本7月経常収支				
	中国8月貿易収支				
	独7月貿易収支				
9日	中国8月消費者物価指数、中国8月生産者物価指数				
10日	増銀審議委員講演				
	独8月消費者物価指数確報値				
	欧州中央銀行（ECB）政策金利				
	ラガルドECB総裁記者会見				
	米新規失業保険申請件数、米8月生産者物価指数				
	米8月中古住宅販売件数				
11日	英7月鉱工業生産指数、英7月製造業生産指数、英7月貿易収支				
	米8月消費者物価指数				
	米9月ミシガン大学消費者信頼感指数速報値				

【前回のレビュー】為替市場ではドルが底堅い動きを見せる一方で、円は緩やかながら売られやすい地合いが続いている。8月31日以降の米経済指標は総じて堅調な結果が予想され、緩やかなドル買い円売りの地合いは続きやすいと見込まれる。ただ、160円接近では介入警戒感が上値を抑えたとみられ、ドル円は高値圏でのみ合いが続くとした。

【日銀の高田審議委員の発言などから大きくドル安円高が進行】

週の前半は159円台半ばから160円台前半でのみ合いとなった。8月31日は、ベッセント米財務長官による日銀への利上げ圧力などを材料に円買いが広がった。ベッセント氏は「日銀総裁は正しい判断を下すと期待、最近の円の動きは抑制されている」と発言した。また、「リフレ政策だったアベノミクスは恐らく終わりを迎えたと考えている」などと述べている。これらの発言を受けて、ドル円は160.20近辺から159.70台まで下落した。

米国とイランの戦闘激化による地政学リスクの高まりから、8月31日のNY原油の期近10月限は2.36ドル高、9月1日に4.46ドル高と急伸して、90ドル台まで上昇した。原油高を背景に米10年債利回りは4.796%付近まで上昇した。原油高や米長期金利の上昇を背景にドル買いの動きとなり、ドル円は1日に160.27ま

で上昇、2日の東京時間には160.39近辺まで一段と上値を伸ばした。

この後、円高が進行することとなった。2日の東京時間にタカ派として知られる日銀の高田審議委員の発言が伝わり、同委員が「利上げ幅はあらかじめ決まっているわけではない」と述べたほか、一般論として「連続利上げもあり得る」との認識を示した。これを受けてドル円は159.40台までドル安円高が進んだ。G20に出席していた植田総裁も「次回の金融政策決定会合を含め毎回の会合でしっかり議論したい」と述べた。

3日の東京市場からロンドン・N Y市場にかけてドル売り円買いの動きが大きく進んだ。円高進行の背景には日銀の利上げペース加速観測などがある。また、年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）の資産構成の見直し観測も円買いを誘った。さらにウォーF R B理事が今後の経済指標で、「インフレの減速が確認できれば、9月の米連邦公開市場委員会（FOMC）で政策金利の据え置きを支持する」と発言したことがドル安円高につながった。ドル円は朝方の158.90台からロンドン・N Y市場では155.30台まで大きく下落した。その後は大きく下げた反動から下げ渋りを見せている。

【米消費者物価指数などに注目】

9月7日～9月11日の週に予定される日米の経済指標やイベントには、7日の日本7月景気動向指数速報値、8日の日本第2四半期GDP2次速報や日本7月経常収支、10日の米新規失業保険申請件数、米8月生産者物価指数、米8月中古住宅販売件数、11日の米8月消費者物価指数や米9月ミシガン大学消費者信頼感指数速報値などがある。

主な経済指標の事前予想と前回は次の通り。11日の米8月消費者物価指数は、前年比では総合が+3.4%と前回（+3.4%）から横ばいとなり、コアは+2.4%と前回（+2.5%）から低下する見通し。一方で、前月比は総合が+0.4%（前回+0.1%）、コアは+0.2%（前回+0.2%）と予想され、8月中の原油高の影響を受けやすいとみられる。市場予想を上回った場合はドル買いに、下回った場合はドル売りに傾きやすい展開が予想される。

2日と3日の大幅な円高進行は市場のセンチメントを一変させている。今回の円高が落ち着いた後は、ある程度の戻りが見込まれる。ただ、その戻りは限定的で、155～157円のレンジを中心とする振幅となりそうだ。目先の予想レンジは152.00～158.50円。

【ユーロドルは最近のレンジでもみ合いか】

10日の欧州中央銀行（ECB）理事会では、0.25%の利上げが見込まれている。1日に発表された8月のユーロ圏消費者物価指数（HICP）速報値は前年比+3.3%と予想通りとなったものの、前回（+2.9%）からは上昇しており、ECBの9月利上げ観測を裏付けている。

ただ、ユーロ相場の上値は重い。その背景には原油高があり、エネルギーを輸入に依存する欧州にとって、原油高はインフレ懸念と金利上昇を招く一方、交易条件の悪化を通じてユーロの下押し要因となる。このためインフレ圧力の高まりや利上げ期待がユーロ高にはつながりにくい。こうした中、ユーロドルは1.15～1.16台を中心レンジとするもみ合いとなりそうだ。目先の予想レンジは1.1450～1.1700ドル。

ポンドドルは8月21日に1.3670ドル台まで上昇した後、軟調な動きに転じている。その背景にはドルの堅調がある。ポンドドルはチャート上でピークをつけると、その後、300～350ポイント程度下落する傾向がある。ただ、売りが一服すると、下げ渋りを見せることとなりそうだ。目先の予想レンジは1.3300～1.3600ドル。

今後の日米以外の経済指標やイベントとしては、7日の独7月鉱工業生産指数、スイス8月雇用統計、ユーロ圏第2四半期GDP確報値、8日の中国8月貿易収支、独7月貿易収支、9日の中国8月消費者物価指数、中国8月生産者物価指数、10日の独8月

消費者物価指数確報値、欧州中央銀行（ＥＣＢ）政策金利、ラガルドＥＣＢ総裁記者会見、１１日の英７月鉱工業生産指数、英７月製造業生産指数、英７月貿易収支などがある。

MINKABU PRESS 佐藤昌彦

※投資や売買についての判断は自己責任でお願いします。

<免責事項>

本レポートは情報の提供のみを目的としています。投資に関する最終判断はご自身の責任においておこなわれるようお願いいたします。また本レポートに掲載している情報の正確性については万全を期しておりますが、人為的、機械的その他何らかの理由により誤りがある可能性があり、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドは、利用者がこれらの情報を用いて行う判断の一切について責任を負うものではありません。また、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドが提供するすべての情報について、許可なく転用・転載等することを固く禁じます。

<著作権について>

本レポートの著作権は、原則として当社(株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイド)が保有しており、著作権法、その他の法律および条約により保護されています。本レポートご利用のお客様は、私的使用目的の複製、引用等著作権法上認められている範囲を除き、当社およびその他著作権者の許諾なく、これらの著作物を翻案、公衆送信、営利を目的とする使用等いかなる目的、態様においても利用することはできません。